



大西脳神経外科病院だより 第44号

# ぶれいん

発行日:令和4年10月吉日

発行:学術図書委員会

発行責任者:大西 英之

編集責任者:吉野 孝広

## 今何を考えるべきか

医療法人社団英明会 大西脳神経外科病院  
理事長 大西 英之

2022年2月24日、ロシア連邦軍がウクライナに侵攻し、いまだに終わりが見えてきません。半年以上地下の塹壕に留まり、食料も水も限られ、太陽も見ずに過ごし、爆弾が突然降り注ぎ、無惨に建物が破壊される現実想像を絶する恐怖と不安、憎しみ、様々な感情にもがき苦しむこの状況はいったいつまで続くのでしょうか。国連(UN:united nations)は機能せず、世界平和を保つ機構として金科玉条のように言われていましたが、第二次世界大戦以降の旧態然とした組織であったことを思い知らされました。

**私達は今、何を考えどう行動するべきなのでしょう。**

まず、なぜロシア連邦がウクライナへ侵攻したのかを知る必要があります。ヨーロッパでは戦争の歴史からEU(European Union:欧州連合、米、露に負けない経済共同体として発足)とNATO(North Atlantic Treaty Organization:北大西洋条約機構、旧ソビエト社会主義共和国連邦(以下ソ連)に対抗する軍事同盟として1949年に設立)が軍事的、経済的に協働することで西欧諸国は強い体制を作りました。それに対抗しソ連は社会主義国家の東欧7か国によるWTO(Warsaw Treaty Organization:ワルシャワ条約機構)を作りアメリカが軍事支援をしている西側ヨーロッパ諸国へ強い圧力をかけました。

その後ソ連崩壊と同時に東欧の幾つかの国がEUに流れ、ワルシャワ条約機構は廃止されロシアも民主化が進むと思われたのですが、特にプーチン政権となって以降、東方拡大するNATOを軍事的脅威として更に対抗姿勢を強める形となってしまいました。





ソ連崩壊と同時にウクライナも共和国として独立しましたがEU、NATOへの参加はウクライナ国内政治の問題やロシアとの関係性から見送られてきました。独立したとは言え元々は連邦国であったロシアとウクライナ、親族や友人、知人も多く個人的関係性は国境を越えても深かったといえます。プーチン大統領はウクライナへの攻撃開始を宣言する演説で「ロシア、そして国民を守るにはほかに方法がなかった」と述べ、親ロシア派の組織が占拠しているウクライナ東部で、ロシア系の住民をウクライナ軍の攻撃から守り、ロシアに対する欧米の脅威に対抗するという「正当防衛」を主張しました。世界的に見れば「プーチンはいったい何を言っているのか」となるところですが、今

のウクライナはゼレンスキー政権のもと親欧米体制でNATOへの加盟を目指しています。これはロシア（プーチン大統領）にとっては我慢ならない状況なのです。そのため様々な理由をつけてゼレンスキー大統領を排除し、ロシアに従順な国に変えたいという思惑が侵攻に踏み切った一つの理由ではないかと言われています。もちろん歴史的背景や民族問題、ウクライナのヨーロッパにおける地理的役割、意義など本質は更に複雑ですので詳しい内容は皆さん調べてみることをお勧めします。



ただ大切なのは私たちが、このような状況を見て何を学び、どう考えなくてはならないのかということ。直接的な関係があるわけではありませんし、現実的に今ウクライナに対して私たちに出来ることはないのかもしれませんが。しかし間接的には物価が上がり、小麦はウクライナが主な生産国ですので、世界的に食糧危機が起こっています。またロシアからの天然ガスの輸出も止まりエネルギー危機も叫ばれています。何が起きているのか、他人ごとではなく今起きていることを知り情勢を把握し自分なりの意見を持つことは、今後起こり得る有事において世界平和ひいては日本の平和、そして私たちの生活の安定や安心を考える為に重要なことだと思います。いま日本は一見平和そうに見えますが本当に安全なのでしょうか。



日米軍事同盟がありますが、自国を自身で守る意志のない日本国民のために死の覚悟で戦ってくれるのかは疑問です。そして想像の世界ではなく近隣アジア諸国から突然侵攻される可能性はゼロではないのです。戦争だけではなく、経済的にも多くの国々と貿易を行っています。もちろん日本からの輸出や技術提供などもあり相互に協力して成り立っています。1国だけですべてが成り立つ現在ではありません。

その中でやはり、今後のあり方を考える貴重な時期なのではないでしょうか。

# Certified Nurse

## 当院 認定看護師の**魅力**に迫る

1995年にスタートした認定看護師制度は、医療が急速に高度化するなか、時代の要請によって生まれました。発足当時は2分野でしたが、あらゆる看護を必要とする状況に応じて改革され、現在21分野があります。医療の高度化に伴い脳卒中患者の死亡率は減少しています。半面、重症度は高くなり日々の管理は医療にかかわるすべての職種が協力し継続する必要があります。その一翼を担うチーム医療のキーパーソンとして当院でも認定看護師の取得に力を入れています。

現在4名の認定看護師と1名の取得予定者がいます。今回はその認定看護師にスポットを当てた特集号です。ひとりひとりの思いが伝わる内容になっています。「私もこんな看護師を目指したい」と思える熱い思いが育成につながれば幸いです。

(看護部長 前田 ゆうこ)

## 「ひととなり」

-学ぶことは人生の盾となる-

脳卒中リハビリテーション看護

認定看護師 北3階病棟 師長 米田 芳子



私の学生時代は看護師イコール、3K「きつい・汚い・危険」と言われた時代で両親からはあまり賛成されなかった選択でした。それでも「自分にも、できる何か」と言う漠然とした想いと、若さの勢いで今日に至ります。20代の頃、先輩看護師にこっぴどく指導頂いた日々がつい最近のようですが…今年で看護師歴27年となり自分でも本当に驚きます。また、50代という節目の中で感じている想いを「ひととなり」に書いてみました。

**認定看護師の資格取得の動機は？**

認定看護師を目指すにあたり、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師を選択した理由は、脳神経の看護が楽しいこと、大西脳神経外科で働き続けるために必要な分野、となると選択は必然的でした。とは言え、分野は何であっても良かったですし、なんでもいいと思っています。認定看護師でなくても自分の目標や目標を探すためにいろいろなものにチャレンジし継続することが大切だと思います。

年齢も関係ないとは思っていますが、認定看護師としての活動や教育課程での勉強は当時40代の私には大変でした。先々の実践を考えても実務経験10年ぐらいで受験できるような目標と実践を行えることをお勧めします。今、私は管理業務を行いながら、認定看護師としての活動を実践しています。実践目線と管理目線のどちらも持ち合わせることでバランス良く業務への貢献ができればと思っています。やりたいことはたくさんですが、体はひとつなのでメリハリつけて継続しています。

### 今後の活動について教えてください？



定年も考えるようになり、私の看護師としての活動も後期を迎えはじめています。後ろ向きではなく、自分自身の変化も受け入れつつ、後輩の育成やハード面での業務改善など裏方として活動できればと考えています。また、認定看護師を目指すような後輩は、もともと立派な「ひととなり」ですが、認定看護師でなくとも個々の個性を活かした成長過程を支援できるシステムを構築したいと思います。

「石の上にも3年」と言うことわざは、私の好む教訓でもあります。ひととなりであるように、与えられる環境も様々です。継続することで見えてくるものもあるはず。どこにいても、どんな環境でも自分次第で、自分でペースも決められるのです。頑張りすぎず、手を抜きすぎず、学びつづける。そうすれば学んだことはきっと自分の盾となってくれます。看護師として一生の盾です。



### 学んだことは看護師として一生の盾となってくれます

なんかずっとモヤモヤする、面白くない、元気が出ない時こそ、明確な目標でなくても、なにかにチャレンジしてみてください。少しでもいいから進んでみてください。看護の仕事は、患者のひととりに救われたり、失望することもあります。脳卒中患者の生活の再構築を考えられるみなさんなら、自分の再構築も考えられるはず。他人の人生を考え看護するみなさんには、みなさん自身の生活も大切に構築していただきたいと思います。

# 地域と病院をつなぐ

## 認知症看護 認定看護師を目指して

幼少期にかかりつけの病院で出会ったいつも優しい看護師の姿に憧れ、認知症で多くの事を忘れても、最期まで「患者さんが待っているから行かなきゃ」と曾祖母が言っていた看護師という仕事に興味を持ち、17年前に看護師になりました。前院では小児血液腫瘍科で働いていましたが、30歳を迎え新たなチャレンジをと思い当院に就職させていただきました。

### 認知症看護を目指したきっかけは？

当院に就職してからは、脳神経外科という新しいフィールドで日々覚える事、学ぶ事が多く、あっという間に数年が経ちました。そろそろ慣れてきたな、病棟で自分が何に貢献できるかと考えていた頃、主任の役割を引き受ける事になり、急性期病棟から回復期病棟に部署移動もありました。回復期病棟では、急性期病棟以上に患者さんの障害受容や家族の受け入れなど、精神面でのフォローや在宅での生活の再構築について深く関わっていく必要があり、これまで得た知識・技術では足りないと思う日々が続きました。

### 認知症看護認定看護師

北3階病棟 副師長 **相原 加奈**



その様な中で、当院で働いている先輩の認定看護師に関わる事も増え、知識や技術の量が自分と比べて圧倒的に高く刺激を受けました。「大変そう、自分には無理だ」と思っていた認定看護師でしたが、自分にもなれるチャンスがあればなってみたく興味を持ち始めました。

## どのような活動をされていますか？



今年の4月から認知症ケア加算Ⅰの算定にあたって、認知症・せん妄ケアチームを立ち上げました。

1つの事を始めるにあたって、全体への周知と実施に至るまでの過程がどれほど難しく時間がかかるものか痛感しています。始まったばかりではありますが、まずは院内の認知症ケアの質の向上と認知症ケア加算Ⅰ算定維持を目標に日々邁進して参りたいと思います。

### 認知症者へのケアは一人では出来ません。

看護部だけではなく、院内の他職種が連携し合っていかなければ成り立たないと思っています。また認知症の方が長く住み慣れた地域で生活していくためには、近隣の病院や地域の方々とも連携していく必要があります。院内の他職種だけではなく、地域の方ともシームレスに連携出来る認知症看護認定看護師になればと思います。

## 脳外科専門病院で働く

## 手術看護 認定 看護師として

私は「手術看護認定看護師」の資格を取得して7年目になります。手術看護認定看護師と聞いて、皆さんはどんなイメージを持たれますか？そもそも手術室看護師が手術に特化したスペシャリストというイメージがあるかもしれません。とすると「手術看護認定看護師」はスペシャリストの中のスペシャリストということになります。

手術看護認定看護師は網羅する範囲が非常に広く麻酔看護や手術看護だけでなく、様々な診療科の知識が必要となります。

### 手術看護認定看護師

手術室・救急外来・中材 主任 **松原 昌城**



さらに認知症の患者さんもいれば、がんの患者さんもいます。小児や妊婦もちろん対象です。ですので手術看護認定看護師の中にも得意分野が存在するのです。私は約10年で二つの脳神経外科専門病院の手術室に勤務し、脳神経外科を得意とする手術看護認定看護師として働いています。つまり、「スペシャリストの中のスペシャリストの中のスペシャリスト」です。日本の看護師ではまだ私一人しかいないのもっと増えれば良いのにと考えています。この専門分野で学んだ知識や技術を活かして、病院外では、雑誌の連載や出版、セミナー講師等の機会を頂いて、活動しています。

最近では、脳神経外科以外の分野でも、手術看護記録や医療従事者のコミュニケーションというテーマでご依頼を頂くことも多くなってきました。今年度も日本手術看護学会近畿地区大会にて医療従事者のノンテクニカルスキルをテーマにしたシンポジストをさせて頂きました。



## 認定看護師を目指したきっかけは？

私は勉強会がしくて認定看護師の資格を取得しました。資格がなくても勉強会は実施できますが、認定看護師の資格があった方が、圧倒的に勉強会を行う機会は多くなり、勉強会の内容に対する信頼度が上がると考えたからです。今では、当初私が考えていた以上に機会を頂き、様々な勉強会を実施することができました。しかし、まだまだ大西脳神経外科病院のスタッフに伝えられていないことがあります。もっと現場で活かせる手術看護の知識を伝えていきたいと思い、今年度は病棟や外来看護師さんを対象に現場で働く看護師の手術看護ツアーを7月に企画し開催しました。

手術や手術看護を知ることで、皆さんの日頃の仕事にも活かせることがあるかと思えます。もし、手術室見学を実施したい方がおられましたら、松原までご連絡ください。また、今年度は1年間をかけて「術中麻酔管理」のパッケージで特定行為研修に参加させて頂いています。

来年度以降は医師の指示なく、一部の医療行為が実施できるようになる資格です。皆様に、ご協力をお願いする事もあるかと思えますので、宜しく願いいたします。

コロナが終息すれば、「市民公開講座」や「手術看護外来」なども実施したいと考えています。私は明石市が地元です。生まれ育った明石市にて、地域の皆様に貢献できるように尽力していきたいと思えます。



もっとたくさんの方のことをスタッフに伝えたい！

# 食べる事への希望

## 摂食・嚥下障害看護認定看護師

SCU病棟 副主任 橋本 加菜

SCU病棟の橋本加菜です。私は十数年前に新入職者として当院で働き始めました。その当時はまさか自分が認定看護師になりたと思い、まさか摂食・嚥下に興味を抱く日がくるなんて思いもしませんでした。何か転帰があった訳でもなかったと思います。ただ「看護ケアの中で口腔ケアが一番好き、口腔内がキレイになったら気持ちがいい」くらいの興味だったと思います。それがSCU病棟で十数年勤務する中で「食べたい」「鼻の管は嫌」と多くの患者さんの想いと向き合う中で、専門的な知識や経験をつけたいと感じる様になりました。

2012年新人歓迎会

### 今どのような活動をされていますか？

そして私は資格習得を決意し2年前より摂食・嚥下認定看護師として活動させて頂いています。

認定看護師としての活動は、おもにSCU病棟や南3階病棟が多く、他部署と関わる機会が習得当時は少なかった様に思います。ですが、昨年はNSTで各病棟をラウンドさせて頂いた事や、勉強会等で関わる機会も増えました。

そういった活動で、私自身の活動内容や存在をアピールできた1年となったのではないかと思います。今年度に入ってからは、他部署からも、気管カニューレの種類選択や栄養摂取方法、嚥下訓練法についてのコンサルテーションがあり、ありがたみと喜びを感じ活動しています。

SCU病棟では一見怖そうと感じているスタッフもいるかもしれませんが、たぶん怖くありません(笑)。そう感じさせないようアサーティブに活動できる事を目標にもしています。こんな事聞いていいのかな?と思った時に連絡してもらえたら喜びます。





そんな私の認定看護師としての役割は、最後まで「口から食べたい」を少しでも安全に叶えられる余生を提供する事です。私が一人で頑張っても多くの患者さんの希望は叶えられません。一緒に働いている医師・看護師・リハビリテーションスタッフ・薬剤師・管理栄養士や在宅に繋げて頂くMSW等全ての職種の方がが必要です。認定看護師として得た知識は出し惜しみは一切いたしません！多職種と協働し、専門性が一方通行にならない活動を心がけ、「食べる事の希望」を残した最大限の援助方法を一緒に模索していけたらと思います。まだまだ未熟な認定看護師ですが、これからも宜しくお願い致します。

# 「感染を見える化」

感染管理看護認定看護師（取得予定）

南3階脳卒中センター 副主任 **出口 英典**

南3階病棟所属の出口英典です。当院へ入社し5年が経ちました。看護師歴は10年になります。以前は総合病院のICUで勤務しており、脳神経外科の本格始動のための準備に携わる中で、脳神経外科領域に興味を持ち、当院への転職を決めました。

## 感染管理に興味を持ったのはなぜですか？

私は今、感染管理認定看護師資格取得のため学校へ通っています。この認定分野に最初に興味を持った理由は、新人時代に経験した人工呼吸器関連肺炎を契機に状態が悪化した患者との関わりでした。その後も様々な医療関連感染を経験し学習と実践を繰り返してきました。

その結果、医療機器や処置に関連した感染症は医療従事者の手により未然に防ぐことが可能性であり、そのためには個人ではなくチームとなって感染防止策を実施することの重要性を学ぶことができました。感染対策の重要性は理解していましたが、感染管理の認定看護師になることまでは想定していませんでした。



しかし、新型コロナウイルス感染症が拡大し、当院でも様々な感染対策を実施してきました。そのような中で、自部署のみでなく、病院全体としての感染管理について、より広い視野を持って活動したいと思うようになり資格取得を決意しました。まだまだ学校が始まったばかりで先は長いですが、10年ぶりの臨地実習に恐怖しながら、実践的な知識と技術を身に付けられるように勉学に励んでいます。

感染管理と聞くと、少し近寄り難いイメージで一步引いてしまう方も多いと思います。私は、皆さんが感染管理上の問題で困った時に、気軽に相談できるような認定看護師を目指したいと思っています。

### 今後どのような活動を考えていますか？

資格取得後の自身の活動として、まずは感染管理において重要な項目である、医療関連感染サーベイランスを実施したいと考えています。これは、医療関連感染の発生率や予防策の実施率などを評価することで、感染管理上の問題を把握できることや、予防対策の有効性についてフィードバックができます。例えば、膀胱留置カテーテルの早期抜去に向けて取り組まれていると思います。



サーベイランスを用いれば、留置日数が何日短縮したか、膀胱留置カテーテル関連尿路感染の発生件数が減少しているかを、「見える化」することができます。このように「見える化」することで、課題や成果を分かりやすくフィードバックしていき、生じた課題について解決できるように自身の活動に繋がりたいと考えています。これ以外にも感染管理認定看護師としての役割は多岐に渡ります。

これから多くの事を学ぶ中で、私に何ができるかを考えたいと思います。

### 編集後記

痛いと感じるほどの厚さがひと段落し秋の訪れを感じさせる朝夕となってきた10月。今回の「ぶれいん」は認定看護師に焦点を当て特集にしました。原稿をいただいてからずいぶん時間が経過したことをお詫び申し上げます。とはいえやはりその道のプロフェッショナル、熱い思いが伝わる原

稿を頂き感謝しています。コロナ禍で黙食が常となっています。そんな時に「ぶれいん」を読んでいたただき、少しでも疲労回復の役に立てれば幸いです。そしてぜひ、ご意見ご感想をお聞かせ下さい。担当吉野までご一報いただくと嬉しいです。（吉野）

